

琉球大学学術リポジトリ

[抄録] 作物切片施用によるトマトヤコブセンチュウの予防

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田盛, 正雄 (抄録) , Tamori, Masao メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015230

作物切片施用によるトマトネコブセンチュウの予防

(Johnson, L. F. et al. : Plant Disease Reporter 51(3): 219~222 1967)

有機質を土壤に施すことによってネコブセンチュウの発生が少なくなることは以前から知られている。例えば、Linfordら(1938)は、パインアップル畑に生のパインアップルの植物体あるいはサトウキビをきぎんで1エーカーあたり50~150トン施すことによってパインアップルのネコブを減らすことに成功し、Duddington(1957)は、キャバツの葉をきぎんで入れることによってカラスムギのネコブが減ることを知った。Johnson(1959)は、11種類の作物の切片がいずれもトマトのネコブを少なくすることをみた。なかでもメドハギは効果

がいちじるしかった。その他いくつかの例がある。ネコブは有機物の種類、施用してセンチュウ接種までの期間、環境条件の差異によって効果が異なる。以上の試験の大部分は温室内のポットで行なわれた。今回の報告は、畑で3年間行なった試験結果である。すなわち、成熟したアルファルファ、カラスムギのわら、メドハギを約3ミリメートルにきぎんで畑に施してネコブセンチュウ(*Meloidogine incognita*)を接種したところ、いずれもネコブの発生を少なくすることがわかった。1エーカーあたり5トンよりも10トン施用区の方が加害は少なかった。施用後間もなく試験するよりも、8か月後の試験の方がよかった。また、一般にこのような植物体が土壤中にあると殺線虫剤の効果も大きいことがわかった。

(抄録 田盛正雄)